
「中国史上における『民族』の問題」と題した本研究は、多民族国家中国を、近代的な「民族」の枠組みからはとらえきれない伝統的部分を解き明かしていくことで理解しようとしたものである。当初の代表研究員である文学部の原島春雄教授のもとでスタートしたものの、残念ながら途中で急逝されたために、その遺志を受けて、鶴間が代表研究員を引き継いだ。原島教授が当初目指したものは、19世紀後半以降、西洋諸国との接触を経て、近代的な意味での「民族」観が移入されるとともに、伝統的な中国の自己イメージとは異なる新たな「民族の神話」が、様々な形で生み出されるところを見い出していこうとすることにあつた。近代と伝統との接触のなかで中国社会が直面した社会変化、それは中国の社会学者費孝通の『郷土中国』の著作のなかに描き出されていた。そこで私たちは毎月東洋文化研究所に集まり、この著作の講読に時間をさきながら、欧米社会とは異なる中国のコミュニティー社会の特性を議論し続けてきた。研究プロジェクトは、中国古代から近現代までの研究者の集まりであつたので、翻訳をしながら議論するなかで、中国社会には時代によって変容した部分と不変の部分とがあることを十分認識することができた。そして伝統的な中華と夷狄という区分、近代的な民族区分、その絡み合いのなかで中国社会がどのように変容してきたのかを理解しえたので、当初の目的はまずは果たされたといつてよい。ここにその成果を調査研究報告として刊行するので、大方のご批判やご意見を得られれば幸いである。

2001年3月

「中国史上における『民族』の問題」代表研究員
鶴間和幸